

博士論文要旨

論文題名：〈1919～1945〉日本男性作家に築き上げられた 中国女性像

——ジェンダー・主体性・ポストコロニアリズム

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

オウ ヨウ

WANG Yang

大正時代以来の日本文学における〈中国もの〉のほとんどは日本男性作家が描いたものである。それらの〈中国もの〉の中にある中国女性像に対するアナライズは往々にして中国像への分析に取り込まれるか不問に付される傾向が強いと言わざるを得ない。したがって、本論は一九一九年から一九四五年までの日本男性作家による小説にある中国女性像やその変容を検討した。

序章では主に中国像に関する先行研究を整理したうえで、本研究の問題意識、時間範囲や研究対象を選定する理由、それに章節構成について説明した。

第一章の第一節では谷崎潤一郎「西湖の月」の「麗小姐」像における欧米文学と漢文学が対決する実態を明らかにした。第二節では中国行き前の芥川龍之介「南京の基督」の「宋金花」における重層的対立構図を炙りだした。第三節において「奇怪な再会」における近代化から篩い落された存在となった「お蓮」という娼婦像について分析した。

第二章の第一節では芥川龍之介「湖南の扇」における「玉蘭」と「含芳」という二人の湖南女性像が革命的な都市長沙の政治的・文化的表象と一体化していることを析出した。第二節では横光利一が楊之華や鐘復光という二人の女性黨員をモデルとして「芳秋蘭」像を充実させたことを解明した。第三節において、阿部知二『北京』における高級妓女「鴻妹」や知識女性「楊素清」の頹廢性が北京の和やかな風趣を構成しているのに対し、「鴻妹」像における政治性、「葉女士」に潜んでいる革命意識や「少女」の社会参画志向は北京の「不穩の氣」を暗示したことを検討した。

第三章の第一節において石川達三『生きてゐる兵隊』、火野葦平『花と兵隊』や上田広「黄塵」、「鮑慶郷」に登場する「姑娘」の群像を捉え直した。第二節では田村泰次郎「肉体の悪魔」と中国作家丁玲「再会」、「霞村にいた時」にある女性黨員像を比較しつつ論じた。「肉体の悪魔」は女性黨員の〈身体〉が肉欲化、懲戒される一面を明示しているのに対して、「再会」、「霞村にいた時」が女性工作員の〈身体〉が革命化されたうえに、消費される一面を炙りだしたと思われる。第三節では、武田泰淳は中国の俠女像や女兵謝冰瑩を「廬州風景」の「楊さん」の造形に投影したうえで、「楊さん」像を「脱女性化」の手法で「強化」したことを分析した。

第四章の第一節では阿部知二の〈上海もの〉にある「李媚」や「曹小姐」が独立した主体性・能動性の持ち主だと指摘したうえで、「李媚」像から看取した新女性の性格が〈両性具有〉的な方法によるジェンダーの既成構造に対する〈脱構築〉の試みを示した

ことを明らかにした。第二節では武田泰淳「月光都市」における「闇姑娘」、「才女」にある「周女士」や「女の国籍」の混血児「陸淑華」イメージを解説した。武田泰淳は多元的文化観に基づいて、「混血性」＝多元性を有する中国人女性の生態をこの三人のイメージを通して前景化させている。

終章では第一章から第四章までの考察をまとめたうえで、本研究の足りないところを考え直して、今後の研究課題を打ち出した。